「復興･協同」通信　No.15 (2014.2.26)

櫻井　史朗

東日本大震災に遭遇して　その３　―孤立無援の鮎川での避難所生活―

１．がれきへの想い

港から街があった辺りに出たとたん、声も出せないほど大きな衝撃に襲われた。そこにはかつて目にしたことのない、心が壊れてしまいそうな世界が広がっていた。まさに「呆然自失」、目は見開いているが何も考えていなかったのではないだろうか。ふと我に返ったとき、「呆然」が「圧倒」に変わった。木造の家は、折れた柱やちぎられた板切れに変り果て、コンクリートの土台だけが哀れに残っている。押しつぶされた車があちこちに散乱し、あるものは屋根の上に鎮座している。本来は海のものである船が陸にある。20～30mもある船が転がったり、屋根に乗り掛かっている。

古来、日本人は自然を信仰の対象としてきたが、海は山とともに特別な存在だった。人々は様々な恵みを与えてくれる海を親しむ一方、得体のしれないものが潜む場所として恐れていた。その恐れが自分の目の前で具現化された思いがした。そう思った瞬間、《自然は恐ろしい》と、心の底から感じた。 人間なんて自然を前にすれば本当にちっぽけな存在だ。強くそう感じて押しつぶされる思いがした。人間が築き上げた文明も自然を前にすればこんなにも無力なものか…。自然を利用する、ましてや支配するなどという考えは傲慢だと痛感させられた。私はシルクロードなどの大自然を長期間ひとり旅することが多い。その度いつも「自然の前に人間は謙虚であれ」と実感する。ところがこの現実は、その思いをはるかに超えている。我々以外に人の姿が見当たらない。人のいない町がこれほど異常だとは思わなかった。がれきは、紛れなく元々生活の一部だったのだ。そう思うと、目の前に広がる光景が「命と暮らしが消えた姿」に見えた。がれきの上を歩いていると、金華山での自分の命がけの体験と、鮎川の人々が遭遇した恐怖の体験がダブってしまう。――パニック状態になって逃げ惑う人びと、津波に飲み込まれて恐怖でもがき苦しむ人の姿、こんな光景が次々に浮かんで来る。まるで、自分が津波の真っただ中にいるようだ。この瞬間までは写真撮影は現場に居合わせた者の使命だと思っていたが、その信念が一挙に揺らいだ。被災した人々に想いを寄せた時、この状況を撮影することは人の大きな不幸や悲しみを撮影するようで躊躇した。しばらくシャッターを押すことができず、呆然と立っていた。だが思い直した。津波直後の現実を撮影できるのは、ごく限られた人間しかいない。現地の行政の人びとは緊急の対応に追われている。報道関係者にしても、道路があちこちで寸断されているので、まだここへ入って来ることはできない。自分の撮影は、貴重な記録として多くの人々や、ひいては被災者の方々の役にも立てるはずだ。しばらく後には、被災者の方々にも自分たちの過去の生活の証として見てもらう機会がきっと来るだろうと思い直して、再び撮影を始めた。

がれきの山の向こうの小高いところに、これから向かう避難所、石巻市牡鹿総合支所が見えた。

地中海風の薄レンガ色の屋根と白いバルコニーのしゃれた建物である。そこまでは 500mほどしかないのに、膨大ながれきに行く手を阻まれているせいか、遥か遠くに見えた。この「がれきの山」を恐る恐る乗り越えながら歩んでゆくのである。“恐る恐る”というのは、足場の悪いがれきを越える不安さではない。多くの人々の思いや歴史が込められたがれきの上を歩いて行くことが恐れ多いという思いであり、人が大切にしていたものを踏みにじってゆくことに対する申し訳なさだ。同時に、犠牲者の遺体ががれきの下敷きになっているかもしれないという、恐れにも似た思いが強くあった。目に見えぬご遺体に対して鎮魂と畏敬の念を心がけ、時には合掌しつつ静かに歩んだ。どうにか総合支所のすぐ前まで来たが、10 数mほど高い所にある支所へ上る坂道やコンクリート階段の前にはがれきがうず高く溜って行く手を阻んでいる。苦肉の策で、隣の公民館の 2 階の壊れた窓からうず高いがれきの上に降り立ち、注意深く渡って支所の駐車場へたどりついた。結局 500mほど進むのに 20 分以上かかった。小高い総合支所から見渡した鮎川は、一面「がれきが原」であった。

２．避難所生活 1 日目(3 月 12 日)

到着後、まず 1 階の事務室に立ち寄って事情を話すと、すでに我々のことは連絡されているようで、2 階にある受付に案内された。2 階の3つの部屋が避難所になっており、ごった返していた。廊下にも人があふれ、せわしく行き来している。鮎川では 4 箇所の避難所に約 800 人が避難し、この支所には最も多い 200 人以上が避難しているという。名簿を見せてもらったところまさしく 2 人の名前があった。思わずほっとした。受付簿代わりのA4 版の紙に住所、氏名、フリガナ、年齢、電話番号を記入した。受付が済むと担当の人が「お仲間の 2 人はこの部屋です」と言って、我々が入る部屋へ案内した。中を覗くと、畳 1 枚程度の広さに 3〜4 人ほどが座っている。非常に窮屈な状態だ。その中から 2 人を懸命に探したが見つからず、建物中をくまなく探しても見当たらなかった。本当にここにいるのか少々心配になったが、10 分ほどして 2 人は姿を現した。牡鹿病院に持病薬をもらいに行って来たとのことだ。何はともあれ、皆で握手しながら無事を喜び合った。全員揃ったので入室するところが、すし詰め状態の部屋に 13 人が加わればさらに窮屈な思いをさせてしまう。気の毒なのでしばらくは廊下で様子を見ることにした。いざとなったら山用の防寒具を着て廊下で寝ようと考えた。しばらく待機していると、金華山から来た18名が 3 階の第 2 会議室に案内された。担当職員は「ここを使ってください。この部屋は地震後ほとんど手付かずなので、相当ひどいと思います。整備していただけませんか」と申し訳なさそうに言う。入り口付近は散乱した机やイスでふさがれ、部屋の中を覗くと、ロッカーやガラス書棚が倒れ、書類や本、割れたガラスなどが床一面を覆っている。両隣りの部屋との仕切り壁も中央部分で大きく崩れ落ちていた。幸い外窓のガラスは無事だったので、冷たい海風が吹き込むのだけは免れていた。何せ電気が通じないので暗くなるまでに作業を完了しなければならない。まず入り口付近をふさいでいる机やイスと危険なガラスを取り除くことから始まった。作業には山用の厚底の靴と手袋と帽子が危険防止に大いに役立

った。特に指揮する人はいなかったが、それぞれがなすべき仕事を見つけ、共同すべきはして作業は効率的に進んだ。他の若い 3 人グループも、われわれロートルに引きずられてけっこう動いた。その甲斐あって日没前には「ねぐら作り」は完了した。ねぐらの整備が終わった 5 時頃夕食になった。この避難所では午前 10 時と午後 5 時の 2 食である。小さい玄米おにぎり1個と水が紙コップ半分だった。 断水なので水は貴重だし、コップや箸はもちろん再使用である。この紙コップと割り箸は以後の食事の「マイカップ＆マイ箸」となった。各人しっかりと油性ペンで記名した。鮎川は孤立状態なので人的支援はまだまったく期待できない。我々がボランティアを申し出ると職員の方々はとても喜んでくれた。主な仕事は給水車からの水の運搬、食料の分類と整理、そして食事の配給である。何らかのご恩返しができることはとてもありがたいことである。

部屋に置かれた携帯ラジオから被害情報が着々と入って来る。全員耳をすまして聞き入っている。我々のメンバーの半数は津波被害が大きい石巻市や東松島市に居を構えており、そうでない者も当地の出身である。家族や親族の安否が大いに気になっているはずだ。しかし、誰ひとりとしてそれを口に出さなかった。さすが大人の集団だ。私の場合、仙台の我が家は海岸から 15 キロほど離れているので、地震による家の倒壊さえなければ、家族は命だけは大丈夫だろうと、なるべく悲観的に考えないようにした。石巻市湊の姉と渡波の姪の家は海岸付近なので流失していることは確実であり、生死さえも心配だった。東松島市の実家は海側前方に自衛隊松島基地が広がっているので、運が良ければ守られる形で流出は免れたかもしれないが、2 階近くまでの浸水は避けられないだろうと思った。だが孤立状態の鮎川にいて何も出来ない自分が、必要以上に心配したり口に出したりしたところで、どうにもならないことだと自分に言い聞かせていた。

避難している地元の人々も立派だった。できるだけ明るくふるまい。落ち込んだり悲壮感を見せたりせず、むしろ和んだ雰囲気さえ感じられた。鮎川は古くからひとつの集落を形成しているため、子供のころから顔見知りでつながりが深い。だからお互いに精神的に支えあっているのだと感じた。この中には家族の安否が不明で心を痛めている人もかなりいるのである。それを表に出さず心を張りつめて頑張っている様子に却ってたまらない切なさを感じた。そして、このような状態でも秩序をきちんと保っていることに感動さえ覚えた。

第 1 日目の寝具は 18 人に毛布6枚だった。東北の 3 月はまだまだ寒い。これではかなりつらい。我々グループは山用の防寒着を持っているのでそれでも少しはましだ。青森県の夫婦に1枚、若い 3 人グループに 2 枚使ってもらい、我々13 人は 3 枚の毛布で我慢した。しかし、職員の方々はもっと大変だ。1 階の事務室やロビーなどのさらに寒い所で、ダンボールを敷いて毛布なしで寝ていた。

職員の方々の中には家を流されただけでなく、家族が行方不明の人も少なくないのである。この過酷な「滅私奉公」がしばらく続くことを思うと〈ご苦労様〉と心から頭が下がった。トイレ事情だが、断水のため大便はビニール袋に排泄して、トイレに備えてある段ンボール箱に入れておく。箱がいっぱいになると消防署の人が処分してくれるという具合だった。

３．避難所生活 2 日目(3 月 13 日)

鮎川は孤立状態で外部との連絡がまったく取れないので、自ら行動を起こすことにした。家族への連絡と車のチャーターを目的にして先発隊を結成することにしたのである。メンバーはリーダー、車のディーラーの会長、そして石巻近辺在住の 2 名である。迎えが不可能なときには、リーダーが責任をもって鮎川残留組の家族に連絡することになった。朝 7 時ごろ先発隊 4 人は 30 キロほど先の石巻へ向けて出発した。残留組は期待と不安で見送った。結局、彼らは戻って来なかった。後日聞いた話では―― リーダー以外の 3 人は自宅が流されるか浸水していたため連絡どころではなく、リーダーがまず石巻市のメンバー宅に歩いて連絡した後、ヒッチハイクで 5 台の車を乗り継いで仙台の自宅にたどり着き、仙台近辺のメンバー宅への連絡は、電話不通のため車で回って行なった。

10 時頃ショベルカーが出動して来た。牡鹿半島の道は寸断状態なので地元業者所有のものだろう。まず総合支所付近の道に積み重なっている大量のがれきを撤去し、昼ごろまでには港や国道につながる道が開かれた。さすが日本だ、動きが早い。復興への第一歩が始まったと心強さを感じた。道が開けたので外へ出てみると、リコプターの飛行音が小さく聞こえてきた。遠方上空にヘリコプターが小さく見える。捜索か救援活動かは定かでないが、とにかく外部との接点が感じられて少し安堵した。いつもは騒音に感じるヘリの音が「希望の音」に聞こえた。“牡鹿半島は見捨てられているのではないか？”と、不安と孤独感を感じていただけに、幾分なりとも希望が湧いた。

昼過ぎ、体力維持を兼ねて支所よりも高いところにある集落へ取材に出かけた。この地域は、地震被害はかなりあるが、津波からは免れたところである。何軒かの家では早くも大工が壊れた家の修理をしていた。日本人は取り掛かりが早いと思った。女川へ向かう道をさらに 2 キロほど歩いて行くと、湧き水からポリタンクに水を汲んでいる 40 歳前後の男性に出会った。この道路は女川へ行く道ですか？　と確認すると、「どこへ行くのかね？」と、逆に尋ねた。これまでの経緯と、今はどこへも行くつもりはないが、いずれ石巻を通って仙台まで帰らなければならない旨を話すと、「近日中に歩いて行くのは絶対にやめた方がいいよ。俺は若いんで石巻からここまでどうにか帰れたが、あんたたちの年齢の人なら死にに行くようなもんだ。せっかく金華山で助かった命を大切にしなきゃダメだよ！」と、叱り口調で言った。そして彼は自分のつらい体験談を話した。―― 震災当日石巻に出かけていたが、鮎川の両親が心配なので、無理を承知で 12 日の朝に石巻を出発して鮎川へ向かった。石巻を出る時は水が胸の近くまであった。牡鹿半島の浜辺の集落はどこも壊滅状態で、集落はがれきで埋まり、人っ子ひとり出会わなかった。集落の人は全滅したんだなあ、と思いながら歩き続けた。時にはひざ以上もある泥の中をズブズブとはまりながら、喘ぎ喘ぎ歩くこともあった。9 時間以上かかった。鮎川に着いて見渡す限りのがれきを目の前にした時は、両親も家もダメだなと失望し、疲れもどっと出てひざが崩れて座り込んでしまった。気を取り直して自宅へ行ってみると、1 階は空洞化して泥やがれきで埋まっていたが、2 階はどうにか残っていた。もちろん両親はいなかった。2 人を探して家に近い避難所を 2 ヶ所回ったがいなかったので、不安と落胆は

ますます大きくなった。そして、藁をもつかむ気持ちで回った総合支所で両親を見つけた。その時の安心は一生忘れないだろう。支所で 1 泊して、住めるかどうかわからない我家に今朝 3 人で戻った――。彼は最後に避難所を出る時、家を失くした人たちに対して後ろめたい気がしてつらかったとぽつりと言った。自分自身が苦しい思いをした上に、他人への気遣いでつらい思いを重ねている姿は実に気の毒だった。おじさんはうなずきながら親身に話を聞いてくれて本当にありがとうと、心からの感謝の表情で言った。被災した人のためにいくらかでも役立つことができ、幾分でも恩返しができて嬉しかった。私こそ感謝された喜びを味あわせてもらい、逆に感謝の気持ちでいっぱいだった。

その人と別れた後、仲間 2 人と出会い、自分たちが乗ってきた車を探しに港へ向かった。3 台の内どうにか 2 台発見できた。久々に同士に会えたような気持ちだった。残骸ではあるが念のため写真に収めた。夕方になって、朝日新聞の記者が部屋にやって来てインタビューを受けた。仲間の紅一点が家族への連絡を切々と頼んだのが功を奏してか、我々の連絡先を持ち帰って可能な限り連絡を取ると言ってくれた。約束を果たしてくれたことが帰宅後わかって感謝でいっぱいだった。

2 日目の食事は、午前 10 時にレトルトの冷たいおじや紙コップ 3 分の 1、午後 2 時にパン 1 枚と水、午後 5 時にさけ入り玄米おにぎり小1個とスープカップ半分であった。〈これなら苦労せずにダイエット出来るな〉と苦笑いし合った。

夕方に担当の人が説明に来て、「情報がまったく入らないので、ここをいつ出ることが出来るかまったく見通しがつきません。長期戦の覚悟をしておいてください」と、すまなそうに語った。ラジオから流れてくる行方不明者の数がどんどん増えてくる。被災地の地名が報じられるたびに、そこに住んでいる兄弟や親戚や知人の顔が浮かんだ。〈大丈夫だろうか？　生きていてほしい〉と、心から祈っていた。朝方になると毛布1枚では寒さが身にしみたが、寒さ以上に安否が気になった。

４．避難所生活 3 日目(3 月 14 日)

我々の朝の日課は、6 時に起床して部屋の掃除から始まる。まず、毛布や、枕代わりのクッションを部屋の隅に整理し、床に敷いていたビニールシートを剥がす。シートを敷きっぱなしにして座っていると、緊急時にとっさの行動が取れないし体力が落ちてしまうので、日中はイスに座っているようにした。いざとなったら、ここ鮎川から 80 キロ以上ある仙台まで徒歩で帰らなければならないからだ。次に、床を掃く。余計な埃を吸いたくないからだ。清掃後は長期戦に備えて、健康管理のためラジオ体操を行った。毎日午前 9 時ごろ給水車(消防車)が到着する。20 リットルポリタンク、給水器、バケツ等で 2 階まで運搬するのである。これも日課の一つだ。大変だが体力維持に役立つのでむしろ歓迎である。水の運搬が終わった 10 時ごろ女性職員から、流出した自動販売機から飲み物類を回収してきてほしいと頼まれた。大体の場所を聞いていたが、念のために途中で地元の人に訊くと、その都度場所が異なり、2 時間ほどがれきの上をさまよった。考えてみると自販機は

何台もあり、流されて位置を変えているのである。結局、職員に案内してもらった。がれきの上を乗り越えながら行くと、すでに他の職員が自販機をこじ開けているところだった。400 本ほど回収してきて、水を節約しながらドロを洗い落とした。

その最中の午前 11 時頃津波警報が発令された。がれきの所どころで復旧作業をしていた人々が、一斉に支所の駐車場や高台へと避難して来た。スタンドの貯蔵タンクに残っている灯油やガソリンを回収中の車もすぐ作業を中止して高台へ走り去った。ところが 1 人のおじさんが、ゆうゆうとバイクで海の方向へ向かって行く。消防隊員があわてて追いかけて説得にかかっているが、それに応じない様子だ。どうにか1分ほどで説得したらしく、バイクを誘導しながらこちらに向かって走ってきた。やれやれ人騒がせな人もいるものだ。しばらく「がれきが原」から人影が消えて静寂が訪れた。固唾を呑んで海の様子を観察していたが、幸いにも大きな津波は来なかった。

津波騒ぎが収まった 11 時 10 分、朝食兼昼食。パン1枚、スープ、なんと初めてゆで卵も出た。地元からの差し入れなのだろう。午後には被災しない農家からの玄米を運搬した。農家の厚意による救援米だ。運搬距離は 1 キロ弱だが、30 キロ袋の重さは 70 歳に近い身にはいささか応えた。午前中回収してきた飲み物を午後のおやつの時間に配ると、被災者の皆さんから「甘いものは久しぶりなので、生き返ったようだ」と大喜びだった。また、夕方にはわれわれが運んで玄米でおにぎりが作られた。皆さんから飲み物とおにぎりのお礼を言われた時には、疲れも吹き飛んだ。人のために働かせてもらうことの素晴らしさを実感させていただき、“感謝されることに感謝”した。この思いがその後のボランティア活動のきっかけとなった。

午前 11 時ごろ、福島第一原発で「水素爆発」が起きたとラジオが報じた。同室の人びとは、「水爆だ！　大変なことになった」とざわめいている。私は化学が専門だったので、水素ガスが空気中の酸素と混じって烈しく反応して爆発を起こしたのだ、と説明すると、少し安心した様子だった。しかし後日わかったことだが、実際には核燃料がメルトダウンを起こして、日本中に長期にわたって放射能被害をもたらすことになったのである。

夕方に浜辺へ行ってみると、母子らしい 2 人が何かを探すように、下を向きながら歩いては止まりを繰り返している。話しかけるのがはばかられたが、思い切って声をかけてみた。「全部流されてしまって…、父ちゃんも見つかってないんです。せめて思い出になるものを探してるんです」と母親は憔悴しきった顔を向けた。母親のこの切ない表情と言葉が胸につき刺さり、逆にこちらの方が大粒の涙を流してしまった。「せめてアルバムでも見つかるといいですね。これからも大変なことが続くと思いますが、がんばってくださいね！」と、声をつまらせながら手を握って別れた。しかし、「がんばって」という言葉が本当によかったのだろうかと、自分自身やりきれなかった。あの時はどんな言葉を掛ければよかったのか未だにわからないが、あれが精いっぱいだったように思う。

夜になって初めて牡鹿半島の情報が入った。だが、「石巻市の牡鹿半島の浜に 100～300 人の遺体が流れ着いた」という悲しいものだった。夕方になってこの支所にも数人の遺体が運び込まれた。

５．避難所活 4 日目（3 月 15 日）

福島第一原発は依然制御が困難な危機的状況が続いている。「菅首相が、半径 20〜30 キロの住民に屋内退避を指示した」という放送がながれ、引き続き関連の情報が何度も流れた。夕方、支所の職員の方が吉報を持って部屋へやって来た。明日 16 日に自衛隊の救援物資搬送車が来ることになり、帰りにその車で我々を石巻まで送ってくれるよう依頼した、と伝えた。その配慮に心から感謝した。〈とにかく、一歩でも仙台に近づけるのだ。予想した以上に早く帰れるかもしれない〉という希望が湧いた。夜、クッションに頭をおいた時、家族がどんなにか自分の安否を案じていることだろうという思いが急に湧き上がった。これまで無理に押し殺していた感情が吹き出てしまった。涙がこみ上げて来て抑えることができなかった。立て続けに頬を伝った。嗚咽をもらしそうになったがじっと我慢した。独りならば思い切り声を上げて泣いただろう。みんなもつらいがきっと我慢しているに違いない。